

人的資源の活用に関するプロセスモデルの開発 ～子どもの学びに対する継続的な関わりを重視する教育支援人材の重要性～

学籍番号 219118

氏名 富嶋 瑛

主指導教員 木原 俊行

副主指導教員 森田 英嗣

1. 所属校における新教科「未来そうぞう科」の実態と課題

本章では、附属学校の現状と課題について述べる。本校は、平成28年度から、文部科学省の研究開発の指定を受け、新教科「未来そうぞう科」を創設するとともに、「未来そうぞう」をテーマにすべての授業を展開してきた。新教科「未来そうぞう科」では、各学年の成長過程と学習内容に合わせて、子どもの興味・関心や思いを参考にしながら授業を展開していく。「未来そうぞう科」の学習の中では、学年団の教員だけでは子どもに与えられる知識や経験に限界がある。また、教員が子どもたちに興味をもって学びたいと思う内容全てに応じることは難しい。そこで、人的資源の活用が重要になる。人的資源であるゲストティーチャー（以下、GT）から子どもたちは、教科書では学ぶことができない専門的な知識やスキルを得ることができる。しかし、本校教員は各自治体からの人事交流で一時的に附属学校に所属しているものが大半である。人事交流は任期末になると、各自治体へ戻らなければいけない。当該教員が学校を去ると、これまで築き上げてきた人的資源とのつながりが一気に失われてしまう危険性がある。そこで、教員が人的資源の活用を容易になるようにプロセスモデルの作成にして、子どもの学びを安定させることをめざすことにした。

2. 教育支援人材の活用に関するプロセスモデルの作成

まず、子どもの学びにとって、人的資源とはどんな存在の人材なのかを考えることにした。学習の中で交流していく子どもとGTとが、お互いに省察・ふりかえりを行って、自己実現をめざす人材であり、そうした条件を満たす人材を教育支援人材と定義した。GTが教育支援人材になり得るためには、あるプロセスをたどることが不可欠であり、教員がそれを参照できるモデルが必要である。

そこで、プロセスモデルをつくるために、「未来そうぞう科」の過去5年間の実践に携わった教員へどんなGTを呼んだ目的やどんなことを大切にしたいのかなどのインタビューを行った。インタビューの結果から、どの教員も、子どもの思いに合わせて、GTにアプローチしていることがわかった。

また、「未来そうぞう科」の過去5年間の実践に携り、継続的に関わってくれるGTにもインタビューを行った。その結果から、子どもと関わることでGT自身にも新たな発見があったり、アイデアを生み出すきっかけを得られたりすることがあった。他にも、教員とめざす子ど

も像の共有などもできることが有効だったそうである。これらをもとに、プロセスモデル（試案）を作成することにした。プロセスモデルとは、教育支援人材が子どもの学びとして有効な材になる過程を図解したものと定義する。R3年度、第4学年の実践にモデルを活用する中で、修正・改善を図ながら、年度末に教員研修で広めることにした。

3. プロセスモデルに基づく各学年の実践

R4年度では、全学年の教員が、各学年の未来そうぞう科における年間カリキュラムの作成を行ない、プロセスモデルに基づく実践を行った。プロセスモデルに基づく実践のうち、第2、3、5学年の進捗状況を確認した。プロセスモデルを活用したのは、F・K教諭、S・S教諭、O・T教諭である。3人の教員のプロセスモデルの活用から、共通点を見つけることができた。事前準備では、3人の教員は子どもの学習を進める上での困り感を把握していた。また、子どもにどんな思いや願いがあるのかをその様子やワークシートから見とっていた。これらを行うことで、GTに教員の意図が伝わり、子どもの思いに寄り添った交流の計画ができた。また、事後においては、S・S教諭やF・K教諭は、動画や手紙などでGTとの今後もつながっていくための工夫をしていた。GTをと継続的に関わっていくことにも意識するようになったわけである。3人の教員の実践では、プロセスモデルは、特に事前と事後に集中して活用されていた。

4. プロセスモデルの評価

プロセスモデルの評価のために、教員と教職支援人材、管理職へインタビューを行った。プロセスモデルの活用における教員と管理職、教職支援人材へのインタビューで、事前の取り組みと、事後の取り組みの2つに、その有用性が確認された。教員がプロセスモデルを活用して、GTに交流の意図や子どもの疑問に感じている思いを伝える。GTは、子どもの思いを踏まえた交流が実現できるようになっていく。GTにとっても、事前に教員と打ち合わせをすることで、教員の意図を知ることができ、子どもの思いに応えるために取り組んでもらえる。事後の取り組みとしては、教員が、子どものワークシートなどを見せたり、活動をふりかえったりすることで、教員にとっては、引き続き子どもの学びを支える人材として寄り添ってほしいという願いを伝えられる。教育支援人材は、子どものワークシートなどを見ながら、次回の交流を考えるようになる。こうした成果や可能性を三者のインタビューの共通点として見出した。

5. プロセスモデル活用の展望

この2年間の研究で、未来そうぞう科の実践において、GTが教育支援人材となることが、子どもの学びを深めるためには大切であると再認識した。プロセスモデルの活用をすることで、GTが教育支援人材となりやすいということが明らかになった。来年度は、より教員に活用してもらえるために簡易プロセスモデルの提示をする。他にも令和5年度の単元計画の素案作成や来年度の研究体制と分掌の見直しをする必要があると考える。